

老子の精髓・神髄(Ⅲ)

中塚善次郎

(キーワード：老子、哲学、自己・他己双対理論)

II. 『老子』断章解説(続き)

17. 天の法の網は広く大きい

(第七十三章) 敢えてすることに勇気があれば、殺したり、殺されたりすることになり、敢えてしないことに勇気があれば、活かしたり、活かされたりすることになります。この両者は、あるいは利益となり、あるいは損害となります。しかし、誰もその利害が何故そうなるのかを知りません。

でも、たとえ私たちが、それを知らなくても、天の法の網は、広く大きく、目は粗くても、そこからもれることはないのです。

この章は、抽象的で、かなり難しいように思えます。解説が学者によって、まちまちです。皆さんも、何度か読み返して頂きたいと思います。そして、自分で考えてみて頂きたいのです。

どんなことを考えられましたか。まだ何も浮かんで来ない方は、もう何度か読みなおして頂きたいと思います。

以下、私の考えたことを述べてみたいと思います。

多くの人にとって、この世で最も大切なものは、自分の「いのち」と自分の「おかね」ではないでしょうか。それは、いのちやおかねにまつわることわざや格言がとてもしんあるのをみても、明らかです。困みに、両方からんだものだけをあげてみますと、例えば、次のようなものがあります。

後生大事や金欲しや、死んでも命のあるように。

死なぬものなら子一人、減らぬものなら金百両。

旅路の命は路用の金。

命は金で買われぬ。

千金の子は市に死せず。

本章で老子も、人間が最も関心の深い、活殺(生死)と利害とを例に挙げて、「物事が相対である」ことの教えを説いているのです。

私たちが、敢えて勇気をもって何かをなすとき、最終的には、命をかけなければならなくなってきました。いわ

ゆる「命を張って」やり遂げる、ということです。そうすることで、もし、命を落としたりしますと、多くは失敗であった、損をしたと一応は判断されます。人からは「馬鹿な奴よ」と物笑いの対象にされかねません。

逆に、敢えて勇気をもって何かをなさないとき、私たちは命を落とさずにすむことができます。そうすれば、大切な命を永らえるわけですから、一応は成功であり、得をしたことになると思うのです。

具体的に言いますと、例えば、死刑のことを考えてみますと、死刑に勇気をもって反対すれば、死刑囚の命は助かりますが、勇気をもって実行すれば、命は終わってしまいます。

また、戦争のことを考えてみますと、どこまでも勇敢に敵と戦いますと、相手を殺すか、最後は自分が戦死するかになると思います。しかし、勇気をもって兵役を拒否したり、突撃を拒否しますと、相手も殺しませんし、自分も死ぬことはありません。両方とも生きていられることとなります。

では、この損得はどうなるのでしょうか。

死刑の場合についてみますと、死刑囚にとっては、勇気をもって死刑に反対し、処刑を中止してもらえば得ですが、勇気をもって実行されれば損になります。しかし、死刑という極刑をうけるほどですから、その死刑囚は、極悪なことをしているに違いないのだと思います。そうしますと、その犯罪の被害者の人は、その囚人が死刑をまぬかれれば「やられ損」だと感じるでしょうし、死刑になれば「仇を取る」ことができ、よかったと思うことでしょう。

また、戦争の場合ですと、勇敢に敵を倒しますと、自分は手柄をたてて得をしますが、敵はいのちを失って損をします。逆に、勇気をもって兵役や突撃を拒否しますと、自国の兵力が弱まり、戦争に勝つという目的から言いますと、国は損をします。また、自分も非国民として皆から非難され、不名誉の誹(そし)りを受け、社会的に損をします。しかし、敵にとっては相手国が弱くなり、その分自国が相対的に強くなるわけですから、得をすることになると思うのです。

こうした戦争や死刑の損得に関して、実際に、死ぬこ

とが損ではなく、かえって得だったと思える例が歴史にはいくつもあるように思います。私がすぐ思い出しますのは、ソクラテスとキリストのことです。二人とも死刑に処せられましたが、その死のためにかえって、二人とも歴史に名を残し、多くの人を救うことができたのではないかと思うのです。

このように、活殺（生死）が損になるのか得になるのかは、全く相対的なことなのです。生死のような人間にとって最も重要な避けえない出来事でも、個人を超えて、つまり個人の執らわれを捨てて、客観的、歴史的に大きな目で見れば、その人にとっても損になったり得になったりするのです。それは、損得そのものがこの世の中の相対的なことに属するからなのです。

人に勝ったり、負けたりすることも、人を死刑にしたり、されたりすることも、勿論、この世の相対なことに属します。それを、損と考えることも、得と考えることも、同様にまた、相対なことに属するのです。

偈に「しかし、誰もその利害が何故そうなるのか知りません。」とありますように、そうした相対なことが、歴史的にその人にどのような特定の意味をもち、どのような特定の利害をもつのかは、実は誰にも分からないのです。と言いますのは、そうした意味や利害は、その時々の中での相対なことに依存して、変わってしまうからなのです。

では、世の中に何か変わらないものがあるのでしょうか。それは、この偈の言葉で言えば「天の法の網」ということになります。私のモデルで言いますと、「法を目指して、より善く社会的であろうとすること」であるということになります。

こうした言葉で表現されていることが、時代の相対的な価値によって変わることはないのです。これらの言葉で表現される原理に適合した出来事の意味や損得は、普遍的に変わらないのです。それを理解できる人がいるかいないかに関係なく、普遍的なのです。

もし、天の法の網が理解できず、それを無視するような人ばかりがこの世にあふれてきますと、人類は滅亡してしまうと思えます。しかし、それも天の法の網のうちにあると言えるのです。それは、人類が背負った全体の業なのです。再び、どこかに新たな人類が誕生し、天の法の網も、新たに実現されてくると思えます。

ですから、私たち、相対者であることを自覚できる人間としては、つまり、滅亡（死）することを自覚できる人間としては、精一杯天の法の網にかなうよう行動し、滅亡をまぬかれるように、努力して行くことが大切なのです。そうすることで、生きることが充実し、幸せを感じることができるようになるからなのです。死を恐れなくてもよくなり、生きていて善かったと、こころの底から感じるができるようになるからなのです。

これまで何度も説いてきましたように、天の法の網にかなって、人さまのために何かを「させていただいてありがとう」と感謝できるように生きることが、実は自分自身が真に幸せに生きる道でもあるのです。

18. 聖人は精神が十全である

前後しますが、第七十一章を取り上げます。

（第七十一章）知らないということを知っていることが、最上です。知らないのを知っていると思うのは、精神としては十全ではないのです。しかし、十全ではないことを十全でないとして自覚できていれば、十全であると言えるのです。

聖人には、精神が十全でないということがありません。前述のように、十全でないことは十全でないとして自覚しているから、十全でないということがないのです。

この章も、深い真理を含み、とても難しいようです。私の読んだ本で、正しく解釈できている本は一つもありません。みんな間違っています。どの本がどう間違っているかは、ここでは省略し、以下、私が感じ、考える解釈を述べて行きます。

さて、この章を理解するのに、キーワードとなることばが二つあります。一つは「知る」で、もう一つは「十全でない」です。もともとの老子の原語は、前者はそのまま「知」ですが、後者は「病」です。この病はとても訳しにくいことばで、日本語のように単に病気とか病んでいることだけを意味するわけではありません。私も、大修館書店の『広漢和辞典』で調べてみましたが、多くの訳語の中にもぴたりするものがありませんでした。そこで、私なりに「十全でない」と訳してみました。これらのことばがどんな意味なのか、順次、本文と共に解説して行きたいと思えます。

まず出だしの「知らないということを知っていることが、最上です。」という部分ですが、これを読んで私は、ソクラテスの「無知の知」を思い出しました。内容は全く同じことを言っていると思えます。

私の読んだ全ての解説書が、この知を「もの知り」とか「知識」の知と考えています。そう考えますと、この文章は「知っているけど、謙遜して、知らないと思ったり、知ったかぶりをしない」といったきわめて処世的で「俗」なことを言っているということになります。そうではないのです。これは、もっと「聖」なことを言っているのです。

私のモデルで言います、この知は「認知一言語（あたま）」の働きとしての知識、知能のことではないのです。

それは、私のモデルで言いますと、無意識について言っているのです。無意識に宿した神や仏のことを言ってい

るのです。それを知らないことを言っているのです。しかし、無意識の神・仏(如来蔵識)を、普通の意味でいう意識として、知ることはできません。意識して知ることができるのは、意識の領域のことだけなのです。無意識は、意識を超えたところに現れてくるものです。ついですが、意識の超え方には、仏教では、坐禅(曹洞禅)のようにこころを空にしてひたすら坐るような方法もありますし、真言密教のように身口意(しんくい=からだ、あたま、こころ)を統一して、仏と我が「入我我入」し、即身成仏に至るような方法もあります。

ともかく意識を超えた無意識を知ることは、普通の人では体験することができません。「ひたすら修行する」人のみが体験することができるのです。

ですから、こうした無意識の体験のない人に「無知の知」を言ってみても、残念ながら、理解できないのです。ソクラテスで言いますと、優秀な弟子であったプラトンでさえ理解できていませんし、また老子で言いますと、これまでの学者で老子を正しく理解した人に、私は出会っていないのです。

この「無知の知」を仏教のことばで言いますと、「無明の知」、つまり無明にいることを知ることになると思います。私のモデルで言いますと、無意識の生命蔵識と如来蔵識とが統合できていないとき、無明にいますが、そのことを知ることになります。そして、無明にいるとき意識の世界は「虚妄」であるということになるのです。知識として知っていると知っていることは、真の知ではないのです。それほどこまでも相対の世界のことですから、相対な知なのです。いつでも変わる可能性のある知なのです。ですから、そんな知識をいくら増やしても、真の知に至ることはできません。知識を得れば得るほど、自分は知っているという執らわれ(執着)を増やしてますます傲慢になり、無明にすることに気付かなくなり、いわゆる無明の闇をどこまでもさまよって行くことになるのです。

普通、難関の大学や学部に進学し、高等教育を受け、自ら読書し、高い学問(科学)や文学・芸術などの豊かな教養を身に付ければ、精神的に高尚になって行くと考えられます。しかし、それは真の知からはかえって遠ざかって行っているのです。

それが、第二のキーワードの精神が「十全でない」ということなのです。つまり、本文にありますように「知らないのに知っていると思うのは、精神として十全ではないのです。」ということになるのです。

普通は精神的に高まっていると考えられることが、実は、真の知をもたらす無意識の統合という点から見ると、ますます遠ざかって行っているとは皮肉なことなのです。

しかし、この皮肉な真実に気付ける人はほとんどいません。この解説を読んで、たとえ理屈として「あたま」

で理解できたとしても、無意識のうちに、あるいは、こころの底からそうした知識が単に人間性(人間としての真の完成)をスポイルするだけのものであると思える人はめったにいないのです。まして、そう聞いたから、では、無意識を開発して真の知に達しようとする人にとってはなおさらのことです。

このことを本文で述べたのが、次の「しかし、十全でないことを十全でない」と自覚できていれば、十全であると言えるのです。」という部分です。

はじめから、自分が勉強するほど(自分がお金持ちになるほど、自分が偉くなるほど、自分が有名になるほど、自分の地位が上がるほど)自分が非人間的になって行っていると思える人は滅多にいませんので、大切なことは、老子のこの解説を読み、老子や私を信じて、ひたすら修行して頂くことです。毎日毎日、ひたすら修行して行くことなのです。

そうしているとき、限りなく十全な精神に近づいているのです。既に、十全であるといってもいいのです。本文の最後の「聖人には、精神が十全でないということがありません。前述のように、十全でないことは十全でない」と自覚していますので、十全でないということがないのです。」という部分ですが、少しだけ敷衍(ふえん)しておきます。

既に述べましたが、この世は相対の世界です。縁起の世界です。諸行無常の世界です。限りなく移り行く世界です。唯識という仏教の思想で言いますと、「虚妄(こもろ)」の世界なのです。また、心理学的に言いますと、「流れ行く意識」の世界なのです。

こうした、うつろい行く世界に精神的に定位していると、いつまでたっても真の安心は得られません。自分の心もうつろってしまうからです。不安定になって行かざるを得ません。それを避けようとしますと、多かれ少なかれ、オウム真理教のように自己を絶対化して行かなければならなくなってしまうのです。これほど非人間的なことはありません。

19. 柔らかいものが強いもの

(第七十六章) 人は、生きている間は、柔らかいのですが、死ぬと硬直します。万物も同様で、草木は生育している間は柔らかいのですが、死ぬと枯れて堅くなります。

ですから、強く強いものは、死に属するものであり、柔らかで弱いものは、生に属するものと言えます。

例えば、兵力を誇るものはやがて滅び、木も堅すぎれば折れてしまうのです。それは、行き着くところ、強大であれば下に落ちつき、柔弱であれば上に翹うようになる、ということなのです。

この章も、きわめて深い真理を述べています。それだけに、これまでほとんど理解されていません。順次、解説して行きます。

まず、最初の段落ですが、これは、たとえとして生きているものは柔らかいが、死ぬと堅くなる、ということを行っているだけです。ですから、どなたにもお分かりいただけることだと思います。

次いで、第二段落ですが、これは、右で言ったことを逆にして、強く強いものは、死に属するもので、柔らかく弱いものは、生に属するものだと言っています。この部分も、多分、お分かりいただけるのではないかと思います。

難しいのは、第三段落の「兵力を誇るものはやがて滅びて行く」という部分以下のところ。まず、この部分ですが、原語は「兵強則滅」です。これは「兵が強ければ、すなわち滅びる」と読みますが、でも、こんなことは、普通、理解できないことです。つまり、兵が強いのに負けるはずがない、と思ってしまうのです。私も、常識的には、それが当たり前だと思いますが、でも、ここではそんな俗っぽい常識を言っているのではないのです。常識を超えた、もっと深い真理の世界（道）に属することを言っているのです。

ですから、それが出来るだけ感じて頂けるように、私は、この部分を「兵を誇るものはやがて滅び」と訳しておきました。このことの真実性は、歴史上どんな強力な武力を誇ったものでも、いつかは必ず滅びている事実を見れば明らかだと思います。平家物語にいう「盛者必衰のことわり」というわけです。

この章でもっとも、分かりにくいのは、次いで出て来る「行き着くところ、強大であれば下に落ちつきませんが、柔弱であれば上に憩うようになる」という部分です。原語は「強大処下 柔弱処上」です。これは「強大であれば下におり、柔弱であれば上にいる」と読みます。

この部分を含んで、この章が理解できなくて、「老子は弱が強に勝つという原則を絶対化するので、かれの結論は実際の状況にあわず、それゆえまちがっているのである。」と結論づけている解説書（最近出版された、ほやほやの本）さえあります。老子もあの世で、苦笑していることだと思います。かつて、第四十一章（10節）で「『下士』と呼べる人は、『道』を聞くと馬鹿にして大笑いをします。でも、こうした人に笑われないようでは、『道』とは言えないのです。」という文が出てきました。まさしくこれを地で行く解説だと思えます。皆さんは、この章を読まれて、どうお考えになられましたでしょうか。私が読んだ本で、このように下士と呼べるような解説をしたものは、さすがに一つだけで、残りは、道を聞いても半信半疑の『中士』と呼べるような人の解説ばかりでした。

以下、私なりの解説をしていきます。

この章のなかで、先ず、考えてみなければならぬのは、強と弱、強大と柔弱、という言葉の対です。

そもそも、ある人、ある家族、ある民族、ある宗教団体、ある国、といった人間ないし人間の集団が強いとは、どういうことなのでしょう。

人でも、家族でも、民族でも、宗教団体でも、国でも同じですが、話を具体的にするために国で考えてみますと、国が強いとか、強くなるためには、どうしたらよいのでしょうか。そのためには、弱点がなかったり、弱点をなくする必要があるということだと思います。

では、国の弱点はなんなのでしょう。それは、経済的・文化的な生産財が乏しいこと、政治的に不安定であること、軍隊が弱いことなどだと思います。

ですから、強くなるためには勤勉に働いて、生産を増やし、政治を安定させ、軍隊を強くすればよいということになります。でも、こうしたことは、私の「自己・他己双対理論」によりますと、すべて「自己」に属することなのです。自国（の人々）の生存の可能性を高め、強大にすることなのです。

では、自己を強大にすることは、本当によいことなのでしょう。もし、そうなった時、人間はどうなるのでしょうか。そのことを考えてみたいと思います。

結論から先に言いますと、実は、人間は難儀なことに、自己を強大にするほど、自己に閉じ、自己を定位する外的な足場を失って行くのです。つまり、自己を不安定な存在にして行くのです。他者を常に、自己を支えるだけ（愛をもらうだけ）の存在としてみなすようになって行くのです。自己を空しくして他者を支えること（愛をあげる）ができなくなってしまうのです。それは、人間の正しいあり方、老子でいえば道ということになりますが、それが分からなくなって行くということなのです。こうなることをこの章では、強大なものは、下なる世界へ落ちて行き（進化から言えば、弱肉強食・適者生存的な動物の世界へと墮して行く）、上なる世界（より人間的な聖なるところ）に昇って幸せに憩うことができなくなって行く、と言っているのです。

結論を先に言いましたので、もう少し敷衍（ふえん）して述べてみたいと思います。

もう亡くなりました深沢七郎という作家の小説に「楢山節考」というのがありました。それは、貧しい農村で、生産に役立たなくなった老人は、降りてこられないような険しい山へ担ぎ上げて捨てる、ということをやテーマとするものだったように思います。

この話のように、年老いた親を山に捨てなければならぬというのは、家族としては弱い家族だと思いますが、でも、私は、この話は人間のあり方としてきわめて深い真理を表しているように思うのです。自分の親を背負って捨てに行かなければならないことは、人間としての弱

さを表すもので、それは、いかにも悲しいことと言えますが、しかしその死は、新たな、より若い生命の誕生や成長、生存のためであり、この悲しみを通じて、私たち人間の真の生き方を示しているように思うのです。

私たち人間は、悲しいかな、自分が強くなるほど他者の悲しみや痛さが分からなくなるのです。自分が傲慢になり、「人の心を感じるころ」が枯れていくのです。自己の生命の延長のみを願うのではなく、『楡山節考』のように、悲しみを味わいながら、社会に迷惑をかけるだけでお役に立てなくなったとき、社会体制として自ら死を選んでいく生き方は、実は、その悲しみを通じて、人に対する思いやりのある、温かい社会を出現させて行くと言えるのです。それは、自己が死を選択するという生命としての弱さの故に、人間としてかえって幸せな社会になっていくと言えるのです。老子の言うように、柔弱なものは上に憩う、と言えるのです。

これは、なにも『楡山節考』だけで言えることではありません。社会の中の障害児・者の存在についても同様に言えることなのです。私は、これまで障害児・者を「弱者としての強者」、普通児・者を「強者としての弱者」として捉えて来ました。

それは、障害者という弱者の存在こそが、多くの強者としての普通の人たちに、自己の存在の意味を教えている、と考えられるからなのです。言い換えますと、障害者(老人も同様ですが)の存在を納得しようとしめると、私たち一人一人の思いや計らい(健常で生まれて欲しい、いつまでも生きていたい)を超えたものの存在を考えないではおれないからなのです。私たちをこの世に贈った贈り主のことを考えなければ、その存在を納得することができないからなのです。

実は、それは障害者だけのことではないのです。私たち一人一人が、みんな私たち人間を超えた「贈り主」によって、「ただ贈られてある」だけなのです。そして、その贈り主(絶対他者)の下では私たちは誰でもが弱い存在なのです。そのことを深く知るとき、私たちは「他己」を取り戻し、他者に対して、思いやりを持ち、温かくふるまうことができるようになるのです。

この贈り主を、神と思おうが、仏と思おうが、道と思おうが、空(無)と思おうが、変わりはありません。それは、この世の存在を超えて、存在を存在たらしめる、絶対、無限、永遠なるものなのです。

私たち人間は、こうした人間存在の実存構造を、弱者の存在を通じて知ることが出来るのです。

この構造を知ることによって、他者に定位し、自己を安定させ、自己の統制と他者への奉仕を実行することができるようになるのです。

本章は、多くの解説書が言うように、相対な人間同士の間での強弱や争いのことを言っているのではないのです。分

かりやすくするために、兵力のような例を使ったため、かえって間違った解釈を生んだようです。

現代は、「自己社会」が、どんどんとその程度を増しながら進行しています。自己の正当性を互いが主張し合い、数の多さ(派閥・民族・宗教などの)や、力の強大さ(経済力・文明力)によって、その主張が通っていきます。それが、たとえ「道」に外れたものであってもです。その前では、少数者や弱者たる「他者のころ」は無視されて行くのです。

この章で述べていることは、そのまま現代にこそ、当てはまるものと言えるのです。

20. 聖人は賢さを現そうと欲しない

(第七十七章)天の道は、ちょうど弓を張るようなものではないでしょうか。真ん中の高く反ったところは押さえつけ、両端の低いところを引き上げて、余ったところを減らし、足りないところはつぎ足すようにするのです。これと同じように、天の道は有り余るものを減らし、足りないものを補って行きます。

ところが、人の道はそうではありません。足りないものから減らして、それを有り余るものに献上しています。

いったい誰が、有り余るほどもっていて、それを天下の人々に献上できるのでしょうか。それができるのは、ただ有道者のみです。

だから、聖人は偉大なことを為しとげても、そのことをたのみとせず、功成りても、その地位にとどまりません。己の賢さを外にあらわそうとは望まないのです。

この章は、『老子』の中では有名な章です。あまり難しいところはないのではないのでしょうか。ポイントと思えることを少し解説しておきます。

まず、はじめの主題は「天の道は、有り余るものを減らし、足りないものを補って行く」ということです。

ところで、この「天の道」とは、どんなものなのでしょう。きわめて抽象的です。また、有り余るものを減らすとはどんなことでしょうか。さらに、足りないものを補って行くとはどんなことなのでしょう。いずれもきわめて抽象的です。

私たち人間の意識を超えた、自然の営みであれば、そこでどんなことが起ころうが、どこまでも自然の営みそのものとして、価値判断を伴うことはありません。どんな動物が栄え、どんな動物が滅ぼうと、あるいは全ての生命が滅ぼうと、なるままになるのです。あるいは、大雨が降ろうが、かんばつが続こうが、大風が吹こうが、大地震が起ころうが、自然の起こるままに起こるのです。そこでは、自然の営みとして、仏教で言えば「縁起」に

したがって、完全に「有り余るものを減らし、足りないものを補って行く」と言ってもいいと思います。

ところが、そこに人間がからみますと、話が違ってきます。かんばつになってもらっては困りますし、大地震が起こってもらっても困るのです。まして、この地球が減びるようなことがあってはなりません。

なぜなのでしょう。

それは、人間が意識をもっているからなのです。生きていることを自覚できるからなのです。相対な存在（この地球を含めてあらゆる存在）は、いつかは存在しなくなって（死んで）行かなければならないのですが、人間はいつまでも存在していきたい、生きていたいと思うことができるからなのです。

それは、いわば自己への執らわれをもっているからだと言えます。仏教で言えば煩惱をもっているからなのです。私のモデルで言えば、「自己」のモーメントを持っている、特に無意識の中に生命蔵識を宿しているからなのです。

ここに、次の主題である、「人の道は・・・足りないものを減らして、それを有り余るものに献上」するということが起こってくるのです。

力のあるものは、生命蔵識の命ずるままに、自己の生存の可能性をどこまでも伸ばそう、拡大しようとしします。いかなる社会体制であろうと、その体制の許す限界内で、「自己」を追求しようとするのです。

そうなりますと、力のない者は力のある者の犠牲になっていかざるを得ません。足りない者が、有り余る者へ献上させられることになるのです。もし、その献上を拒否すれば、すぐに、戦いや無法や死に結びついて行きます。

この現実、いまも変わってはいません。現在、日本も力をもつ存在となり、その力によってますます経済的に繁栄し、現在の体制の許す範囲で、世界中から献上させています。例えば、食料ですが、人間の食べられる量は限られているのに、輸入する食料の量はだんだんと増えています。ですから、増えるうちの多くは、残飯になっているのです。もし、贅沢をしないで、その数パーセント、いや残飯に当たる部分でも、飢え死にしている国にあげれば、どれほど飢えから救われるか分かりません。でも、人の道はそうはなりません。力あるものが、いわば合理的・合法的に、当然なこととして、自己の生存可能性を追求し、力のないものから、たとえ飢えていようと力によって、献上させるのです。しかし、このことが悪だとは誰も思いません。どこまでも、合理的・合法的で、人間として当然のことなのです。

特に、現在は世界中が「自己」社会に傾いています。あらゆる人が、昔の王さまのように、自己を追求しようとしていますし、先進国では多くの人はそうすることが

できるようになっています。その結果、人々の結びつきは疎遠になり、社会体制をいかに工夫しようとも、社会の解体を阻止することはできにくくなって来ているのです。

ここで老子が言っていることは、私たちは天の道を体得することができますが（本文にありますように、道を体得した人を老子は有道者と呼びます）、そうなる時、天の道を実践して、贅沢を戒め、生活に余ったものは、労力を含めて、困っている人さまの為に差し上げることができるようになれる、ということなのです。

前にも述べましたように、天の道とは、自己への執らわれを捨てたところにあります。それは、私のモデルで言いますと、「他己」モーメントの無意識にある「如来蔵識」と「自己」の無意識にある「生命蔵識」とを統合することなのです。そこは、ひとの喜びが我が喜びであり、ひとの悲しみが我が悲しみである世界なのです。

人間は動物から、意識を持つことができるように進化しましたが、同時にそれは自己だけではなく、他己を持つようにも進化しているのです。生きていたいと意識できる人間が、他己を欠き、自己だけしか与えられていないとすれば、人間社会は滅亡する以外にありません。

人間は、自分が生きていたいと意識することができると同時に、精神的に他者なしでは存在できないように創られているのです。その心を、私は「自己」と「他己」と呼んでいるというわけです。

これが、人間の自然なのです。天の道なのです。自己が生きていることを自覚して追求できる人間にとっては、自然は、自己が生けると同時に、自己の心を開いて、他者と情動を共有することで、自己を安定させるということでもあるのです。

そうなるためには、自己への執らわれを捨てなければなりません。自然現象として起こることのような、自己の力を超えて起こることには、従順でなければならないのです。それは自己の命についても言えることです。それは、人さまの役に立たなければ、もう生きる必要がなくなることでもあるのです。

では、自己への執らわれを捨てるためにはどうすればよいのでしょうか。

まず、大切なことは、老子のような聖人の言うことを信じて、それを実行しようとするということです。ひたすら努めることです。どこまでも、どこまでも努めることです。たとえ直ぐに実現できなくても、そうなることを信じて、必死に努めることです。その中には、既に紹介しましたような「修行」が含まれています。

そうしているとき、はじめてこの章にも書いてありますように、「偉大なことをなし遂げても、それを頼みとすることがない」というようになって行くのです。

それを頼りにしなくても、自己と自分の心に宿した仏さまとが一体になることによって安定していただけるから

です。仏さまという絶対な他者に自己を定位さすことで、自分自身が絶対な境地に至れるのです。

そうなる時、誰に認められなくてもよいのです。ノーベル賞をもらわなくてもよいのです。文化勲章ももちろん、もらわなくてもよいのです。

ここで、老子をもう少し敷衍(ふえん)して述べますと、実は、天の道は人の道でもあるのです。いや、人の道が天の道とならなければならないのです。

ただ、いま述べています人の道は、この章で使っています人の道とは少し違っています。ここでいう人の道は人の踏み行すべき道、難しい言葉でいいますと、人倫である、と考えて頂きたいと思います。本文の解説で述べました「社会体制」は、この、人が踏み行すべきだと、その時代に考えられていることに基づいて制定ないし設定されているものです。

それは、社会規則であり、法律であり、制度であり、風習であり、伝統であり、道徳であると言えます。これらを含むものは、人と人が交わす社会的な約束なのです。

でも、こうした約束は、力のあるものによって、いつでも、はかなく踏みにじられていきます。例えば、人類は「殺すなかれ」という共通普遍的な「人の道」をもっていますが、この約束は、優越欲(権力欲)、食欲(物欲・経済欲)、性欲(子孫繁栄欲)などの欲望や、恨みとそれに対する復讐・制裁、といった「自己」の追求で、はかなくも踏みにじられてしまうのです。そのことは、これまでの人類の歴史を見れば一目瞭然です。こうした事情は、「殺すなかれ」だけにとどまりません。「盗むなかれ」や「嘘をいうなかれ」などでも、当てはまることです。ですから、もっと些細な約束事は言うに及ばないのです。

これを超える道は、多くの人が、特に力を持つ者が、老子の言うように「有道者」となることです。

その為には、修行がいきます。瞑想がいきます。ヨーガがいきます。どうぞ皆さん、お励み下さい。

21. 真理は反対のようにみえるもの

(第七十八章) 世の中に水ほど柔弱なものはありません。なのに堅強なものを攻めるのに、これにまさるものはないのです。それは、どんなものも水の柔弱な性質を変えることができないからです。

このように、弱いものが強いものに勝ち、柔らかいものが剛いものに勝つ、ということは、世の中に誰も知らないものがないのに、実行できる人はいません。

だから聖人は言います。「一国の垢を引き受けるものをその国の主人と言ひ、諸国の不祥を引き受けるものを天下の王と言ひます」と。

真に正しい言葉は、一見、反対のようにみえるものです。

この章は、水を例に挙げて、道を説いています。あまり難しいことばはありませんが、深い真理を述べています。順次、解説して行きたいと思います。

最初の節では「水ほど柔らかく弱いものはないのに、堅く強いものを攻めるのにこれに勝るものはない、それは水の性質を変えるものがないからだ」と言っています。

これは、水は「弱いのに、強い」という矛盾した性質をもっていることを例としてあげているのです。

水が柔弱であることは、多言を要しないと思いますが、例えば、水は相手に合わせてどんな姿にも形を変える事が出来ます。例えば、入れられる容器に合わせてどんな形にもなれますし、また、熱に会えば蒸発して一見無くなったように見えますが、天に昇って雨になり再び地上に降りてきます。また、冷やされれば、凍って液体から固体に変わりますが、温められれば再び、液体に戻ります。さらに、高い所へ置かれれば、重力に従って低いところへ移動しようとして流れ出して行きます。このように水は重力に逆らわず、姿も環境に応じてどんなにでも変わることができるのです。

しかし、最後に述べました重力に逆らわない性質は、水が大きな力を生み出すもとになっています。本章に述べています、柔弱なのに強固なものを打ち負かすのは、一つには、その移動する力が強大なエネルギーとなるからなのです。現代では、ダムを作りこの力を発電に利用しています。またダムは、洪水を防ぎ、人間が生活するための水の需要を満たす重要な役割を担っています。

では、私たちの生活の中で水がどんな働きをしているのか、そしてその重要さと偉大さはどれほどか、具体的に考えてみたいと思います。

一番さきに思い付きますのは、水不足に関するものです。お大師さんのお生まれになられた香川県は四国でも降水量が少なく、また地形的に大きな川がありません。ですから、お大師さんの改修された満濃池をはじめとする、ため池がたくさんあります。でも、干ばつがあれば、すぐ水不足になり「讃岐砂漠」が出現します。そうなりますと、水の有り難さ、水の偉大さをいやというほど感じさせられるわけです。水がなければ、人間のどんな強固な生活も成り立ちません。たとえ堅固な城を築いてたてこもろうと、雨が降らず、水も断たれば出て降伏する以外にはないのです。

次に、水が多すぎるという逆の場合もあります。雨が降り過ぎて、洪水になったり、地震によって津波が来たり、台風で大波が押し寄せたり、攻撃するために、川をせき止めて水を貯めたりするという場合です。どんな堅固なものも水の勢いによって押し流されたり、陥没させられたりするのです。

お城を攻めることでいいますと、豊臣秀吉による備中高松城の水攻めが有名です。また、繁栄を誇った強固な

ヨーロッパの都市が、地殻変動によって一夜で海の底に沈んだ例も歴史に残っています。なお、洪水や津波、台風の脅威の実例は枚挙にいとまがないほどあります。

また、ことわざとしても「あまだれ石をうがつ」「水滴石をうがつ」というのがあります。柔らかい水が、永い間には堅い石に穴をあけるという意味です。

次に進みます。次の節では「水のように弱いものが強いものに勝ち、柔らかいものが剛いものに勝つ、ということ、世の中に誰も知らないものがないのに、実行できる人がいない」と述べています。

この「弱いものが強いものに勝つ」と同様のことは、既に19節で紹介しました第七十六章にも述べられています。ご確認ください。

少しだけ補足しておきますと、『平家物語』にもありますように「おごる平家は久しからず」なのです。いかに栄華を誇り、天下を我がもの顔にした平家も、源氏によって間もなく滅ぼされてしまいました。

何故なのでしょう。いろいろ個別な原因は分析できると思いますが、大切な要因は「おごる」ということです。人間というものは、自分が偉いとか、自分ではできるとか、自分には力があるとか、自分は金持ちだとか思った途端、実は「ころ」が貧しくなりはじめているということです。「人の心を感じるころ（他己）」の方は飢えはじめています。別の言い方をすれば、自分が自分で付けた「ころの垢」で窒息しているのです。そして最後には、遂にころ（他己）は死んでしまうのです。そうなりますと、他者のことも、自分のことも、客観的に見えなくなり、社会の中で自分のなすことが分からなくなってしまうのです。そして、悪ばかりをなすことになるのです。それが、「おごる平家」の行く末を創りだしたと言えるわけです。

このように、強者と呼べる人たちは、強者になることで他己を喪失し、やがて、弱者であった人たちによって滅ぼされていくのです。そしてまた、滅ぼした人たちが、自らを強者として、やがて再び滅ぼされる運命を背負うことになるのです。これまで、こうした栄枯盛衰が、人類の歴史の中でどれほど繰り返されて来たことでしょうか。

しかし、ここで言う「実行できる人がいない」という「弱いものが強いものに勝ち、柔らかいものが剛いものに勝つ」という言い方は、ただ、誰でもが知っている、時間の流れの中で生まれてくる、相対者の相対的な力の差による、単なる栄枯盛衰についてだけ述べているのではありません。もっと深い真理を含んでいるのです。だから、誰でもが実行できがたいのです。

その深い真理とは、ここで述べている「弱い・強い」とか「柔らかい・剛い」ということばの内容に関わることなのです。一般に、強い・剛いと言いますと、既に述べましたように、力、つまり様々な能力、腕力、武力、

権力、財力、があることを形容しているように思われます。また、弱い・柔らかいと言いますのは、その逆のことを言っているように思えるのです。

しかし、ここでいう深い真理を述べる時には、そうではありません。難しいかも知れませんが、強い・剛いと言いますのは、矛盾的に、いわゆる強者にいわゆる弱者が勝っているのは、こころの状態であって、それが強い・剛いと言っているのです。それは、究極的には、こころの中の安心立命の境地のことなのです。勝ち負けで言えば、その境地に至るとき、敵に勝つよりもっと難しい自分自身に打ち克つことができるということなのです。それは、実は、なにものによっても失われない、この章の水のたとえで言えば、どんなものも変えることができない性質、永遠（で無限で絶対）のいのちを頂くことでもあるのです。ですから、これ以上、強く、剛いものはないのです。

しかし、誰でもが、ものごころ付いたとき、こうした強く・剛い境地になれるわけではありません。そうなるためには、一般的な意味の「力」を付けるのではなくして、逆にそれを捨てなければならないのです。そうした力への執らわれ（＝命への執らわれ）を捨てなければならないのです。そうして捨てた状態は、一般的な意味で言えば、弱く・柔らかいということになるのです。

逆から言いますと、いわゆる弱者と言える人ほど、力がありませんから、その分、こころの中に力への執らわれをもたなくてもよいのです。それだけ、こころは強く・剛いと言えるのです。

次の、「だから聖人は言います。『一国の垢を引き受けるものをその国の主人と言ひ、諸国の不祥を引き受けるものを天下の王と言ひます』と。」という部分ですが、この部分を読んだとき、私はキリストのことを思い浮かべました。キリストが生きていたとき、教を説いた人たちは、多くは社会からはみ出した人たちでした。それは、犯罪者であり、売春婦であり、病人であり、貧困者だったのです。実は、その人たちこそ、ここで言う、一国の垢であり、諸国の不祥であると言える人たちなのです。キリストは、そうした人たちを、自らに引き受け、救おうとしたのです。まさに、キリストこそ、国の主人であり、天下の王と言える人だったというわけです。

勿論、その当時に、いわゆる主人と呼ばれる人も、王と呼ばれる人もいました。実は、その人たちによってキリストは、はりつけの刑に処せられたのです。ですから、その人たちは、いわゆる強く・剛い者であり、キリストは、いわゆる弱く・柔らかい者であったと言えます。

しかし、真実はその逆で、キリストこそこころは強く・剛い人、自らのこころの中に神の国を体現し、永遠のいのちを頂いた人であり、逆に、当時の人々から主人と呼ばれたり、王と呼ばれたりしていた人こそ、こころに執

らわれの垢をこびりつけ、過ちばかり犯す、弱く・柔らかい人であったと言えるのです。

このように、キリストは、水のように、柔弱にこの世の状況に応じて死刑に甘んじましたが、しかし、ここには強く・剛い永遠のいのちを頂き、その当時の主や王のはるかに及ばない、多くの人を幸せにする強大な力を発揮したのです。これが本章の最後に述べている「真に正しい言葉は、一見、反対のようにみえるものです」という意味なのです。このように、ここで述べている言葉は、単に処世の術を意味しているだけではありません。深い真理を含んでいるのです。

22. 聖人の道は為して争わない

(第八十一章) 信ずべきことばは美しくなく、美しいことばは信ずるにあたいしません。善である人は能弁でなく、能弁な人は善ではありません。智である人は博学でなく、博学な人は智ではありません。

聖人は積まないで、ことごとく人に与えますが、自分はいよいよ豊かです。

天の道は、利益を与えて、害は与えません。聖人の道も為して争いません。

これらのことばは、かなり逆説的ですが、極めて深い真理を含んでいます。それだけに、分かりにくくなっています。順次、解説して行きたいと思います。

まず出だしの「信ずべきことばは美しくなく、美しいことばは信ずるにあたいしません。」ですが、なかなか含蓄が深く、理解できにくいのではないかと思います。

孔子の言葉に「巧言令色、鮮(すくな)し仁」というのがあります。話が巧みで、人あたりのよい人は、仁が少ない、といったほどの意味ですが、これなら常識的で、日常生活の中でいくらでも実例をあげることができます。ですから、誰でもが「その通り」と納得するのではないかと思うのです。

ところが、信ずべきことばは美しくなく、美しいことばは信ずべきほどのものではないと言われますと、「待てよ、そんなこと。じゃあ、信ずるとは何なのか、美しいとは何なのか」と言いたくなってくるのではないのでしょうか。

これまでの老子の解説でお分かりと思うのですが、老子のことばには、常識を超えた深い意味、深い真理が含まれています。ですから、一つ一つのことばを常識で理解するのではなく、その本来の意味を吟味しなおしてみる必要があるのです。

まず、美しいということですが、これはかなり主観的です。美を感じる感じ方は、人により千差万別です。ですから、美しいことばも人により、かなり違いがあると思うのです。美しいことばを追求するのは、文学ですが、例えばその中で、私がかつてよく読んだ坂村真民さんの

詩は美しいことばで述べられています。真民さんが自らの真言とされる「念ずれば花ひらく」ということばも、とても美しいと思います。でも、真民さんもおっしゃっていましたが、この真言を聞いて、実際につぼみの花を摘んできて、真民さんに突きつけ「念じて花を咲かしてみなさい」というように即物的にとる人さえいるのです。このことばにどう感動するかは、一人一人万別なのです。真民さんを実例にあげさせて頂きましたが、これは他の詩でも、小説でも同様です。どんなに美しいことばでも、「美」として追求される限り、それはどこまでも、私のモデルで言います一人一人の「情動」や「感覚」といった、「自己」に属することなのです。

では、それを「信じる」とはどんなことなのでしょう。ちょっと難しいかも知れませんが、それは、無意識の自他の統合に基づいて、意識水準の自他それぞれの精神機能の統合をはかることに関係しているのです。つまり、自己の感覚や情動を楽しんだり、自己の主張を押し通したりするのではなくて、他者の心を感じて、それを尊重すべく自己の情動を制すること、および、人が社会的に認めているしきたりや法に従って行動すること、に関係しているのです。自己が決めたことを自分でどこまでも守ることに関係していることなのです。

具体的に言いますと、例えば、釈尊のあげられた五戒があります。それは、①不殺生、②不偷盗、③不邪淫、④不妄語、⑤不飲酒ですが、この他にも、十善戒や六波羅蜜などがあります。こうしたことばは、美しいとは言えませんが、信ずべき価値のあるものです。自分ではすぐには達成できなくても、ひたすら信じて、それに従おうとすべきものなのです。現代人のように自己に閉じ、居直って、信じることを止め、文学のような甘美なものに耽ってはいは、この世は全体として墮落していくだけなのです。差別も戦争も不安もなくなっては行きません。人間が人間らしく生きていくのに、理屈はいりません。たった五つの戒律を誰もが守れるように、自分を磨いて行くだけなのです。美しい文学や美しい美術や美味な料理は、自己を癒し慰めるかもしれませんが、人間が人間らしく生きるのに、本当はたいして意味はないのです。

次の二つの文に移ります。それは「善である人は能弁でなく、能弁な人は善ではありません。」と「知である人は博学でなく、博学な人は智ではありません。」です。この二つの文に出てくる能弁と博学はどちらも、「あたま」の働きである認知一言語に属します。言葉を巧みに操り、しゃべることが能弁であり、言語で様々なことを知識として得るのが、博学です。

では、これらと対になる「善」と「智」とは何なのでしょう。まず善ですが、これは、自我一人格の働きに属することです。善や悪は、特に、その中の他己に属する人格の働きとの関係できまることなのです。人間は、自分

一人で住む世界なら何をしても善とか悪とかはありません。ある行為が善となるか悪となるかは、多くの人々がしきたりや伝統として認めているか、法にかなっているか、などに従って判断されます。例えば、しきたりや伝統の類になると思うのですが、江戸時代ですと、敵討ちで相手を個人的に殺すことは、武士として立派なこととされましたが、今では殺人罪に問われますし、逆に、亭主のある女性を誘惑して駆け落ちなぞしますと、江戸時代なら市中引回しのうえ獄門磔の刑に処せられましたが、今では刑法上の罪にはなりません。

ですから、こうした善悪は時代に相対的だと言えます。でも、全ての善悪がそうではありません。いつの時代でも普遍的な、法と呼べるような善（や悪）があります。それは、既に述べましたように、五戒であり、十善戒であり、六波羅蜜であると言えるのです。この中には、一見して、他者についてではなく自分のことについてものがあります。例えば、五戒の中の不飲酒や、六波羅蜜の中の精進や禅定や智慧です。こうしたものは、そうしなかったからといって、直接、あるいは直ちに、他者に迷惑を及ぼすわけではありません。ですから、これらの徳目は現代では僧侶にすら守られていないのが現実です。

でも、それは表面上のことであることに気付かなければなりません。相対的ではない、普遍的な法を実現するための他己に属する人格の働きが十全に発揮されるためには、実は、自己と他己の統合が要るのです。それも意識してできるものではない、無意識の統合が要るのです。釈尊のことばでいいますと「天上天下 唯我独尊」と言える自内証（自分自身の心の内に感じるもの）がいます。それは絶対自己の自覚と言えますが、同時にそれは、絶対他者（仏や神）の自覚でもあるのです。そうなったとき、真に他者のために善をなし、悪をなさなくてもよくなるのです。

このようにみてきますと、善は、認知一言語の働きを超えた働きであることが分かります。これは、次の智についても同様です。智は、知識とは違うものです。知識は「あたま」の働きですが、智は自己・他己の統合されたとき出てくる覚りの智慧、仏の智慧なのです。現代人が大切にしている知識は、善をなし悪をなさないようにするのに、殆ど役に立ちません。行動に際して自己への執らわれがあれば、そうした知識は考慮されなくなったり、自己を主張するのに有利なものだけが使われるようになってしまうのです。それは、人格の働きについても同様です。智慧と呼べるものは、自己への執らわれを離れて、「行住坐臥が法にかなう」といえるようなものでなければなりません。

次に進みます。「聖人は積まないで、ことごとく人に与えますが、自分はいよいよ豊かです。」ですが、この文も、かなりあいまいです。何を積まないのか、何を与えるの

か、なにが豊かなのか、など明らかではありません。読む人が補って読まなければなりません。以下は私の一つの解釈です。

まず、積まないのは何なのかですが、今まで読んだ本ですと、それを財産と解釈する人が多いのです。でも、私は、自己のためにすることがないと解釈したいと思います。もっと言いますと、自己のために生きるのではないということです。生きているのは他者のためだけである、ということです。

それが、次の「ことごとく人に与える」ということなのです。ですから、与えるものは自分自身ということになります。

そうするとき、自分自身の心はこの上なく豊かであるというわけです。

現代の日本を見てみますと、経済的に極めて豊かになりましたが、それと引換えに人々の心はどんどんと貧しくなって来たように思えます。人に愛をあげるのではなくて、人から愛を貪欲にもらいたがっています。それが、心が貧しくなっている証拠です。老子で見ましたように、自分が生きるのには、自分のためではなく、どこまでも他者のためであるというような境地になるよう、日本人皆が、こんなこと言える老子の爪の垢でも煎じて飲んで欲しいと思います。

最後の「天の道は、利益を与えて、害は与えません。聖人の道も為して争いません。」ですが、これも天の道とは何なのか、意味がはっきりしません。それを、天然自然の道ととる人が多いのですが、私は、神の道、仏の道、あるいは、法の道ととりたいたいと思います。それに対して、聖人の道は、天の道を体得した人が示す人の道ととりたいたいと思うのです。私のモデルで言いますと、自己と他己が統合されたとき、実は、人の道は法の道でもあるのです。そうした道を体得した人は、既に述べましたように、自己を捨てて他者のためにのみ生きるわけですから、利益を与えても害は与えず、自己の利益を主張して争うことはないのです。

III. おわりに

本節を『老子』解説の最後にしたいと思います。

最後ですので、特定の章ではなく全般的なことを書きたいと思い、あらためて、これまで取り上げて解説してきました二十二回分を、自分で読み直してみました。

どの回も深い真理を述べていて、既に知っていることなのに、感動をおぼえました。

それらは、どれも常識を超えていて、普通では分からないことばかりだと思いました。その点は、大体同じ時代を生き、常識的な処世術を説いた「孔子」と好対照をなしています。

今回は、なぜそうなったのか、その差はどこにあるの

か、などについて、先ず、検討しておきたいと思います。それを一口で言いますと、それは、孔子は能才でしたが「解脱」していなかったのに対して、老子は解脱に達していたということです。

ここで大切なのは、常識的に孔子が説くことが、解脱していない常識的な人に実行できるかどうか、ということです。

実は、当の本人の孔子すら実行できていなかったと思われませんが、それは、人間が「はからって」できることではないのです。例えば、孔子の教えの中心は「仁」ですが、それは自分を制して、他者を立てること、愛することです。しかし、それが確実に、間違いなく、自然に、実行できるのは、解脱に至ったときだけなのです。

多くの人は、自分のことではなくて、客観的に他者が「どうなすべきか」の判断を求められるときには、正しい、義になかった、善い判断をすることができるかもしれませんが、それは、現実を離れた架空のことであって、自分が全く利害関係をもたない、自分がした判断の価値も現実のこととして問われず、完全に自分が引き込まれない中立的な状況にあるときだけなのです。もし、現実の生活の中で、具体的に自我が巻き込まれた現場的状况では、まったく話は変わってきます。

一つの例として、ドイツの哲学者たちの例をあげることができます。カントは「定言命法」として「汝の意志の格率がつねに同時に普遍的立法の原理として妥当しうるように行なせよ」「汝の人格ならびにすべての他者の人格における人間性を、つねに同時に目的として用い、決してたんに手段として用いないように、行なせよ」と述べて、自己の哲学体系の中に普遍的な道徳律として、人間の為すべきことはこうだということを、今までの宗教家が説いて来た通りに、間違いなく、明らかにすることができました。それは、簡単に言いますと「自分がいやなことを他人にするな」ということです。

しかし、その哲学を発展させたドイツの哲学者たちのうち、ヘーゲルは「戦争こそが文化を発展させるものだ」として戦争を賛美していますし、ハイデッガーもナチを支持し、ナチに期待しました。また、マルクスに至っては周知の通り、その学説のためにどれほど多くの人の尊い生命が失われたか、数え切れないほどです。勿論彼らが、カントの定言命法を知らなかったわけではありませんが、自分が為す行為は、これとは殆ど無関係だったのです。

科学や学問として「あたま」で知ったこと(知識)を、現実の世界で使うときは、よほど、このことを「反省」しなければならないのです。でも、「あたま」で知ったという自負は、人間の学名であるホモ・サピエンス(知性人)の名の通りに、自己の知性への執らわれを生み出し、自己を肥大させ、自己を絶対化させて、他者のことを眼

中から消してなくしてしまうのです。ですから、この「反省」も有名無実になってしまいます。

ここが、孔子と老子の決定的な違いなのです。つまり、この両者の違いは、人間が「知ること」と「行うこと」とは別のことだということを知っているか知らないかに関わっています。

老子は、知ってその通り行えるためには、道を体得することが必要だと言っているのです。仏教のことばで言えば「解脱」しなければならないと言っているのです。私のことばで言えば、自己と他己の統合がいるということです。しかし、それはとても難しいことですので、たとえ道を体得できなくても、道を体得した人の言うことをひたすら信じ、それに則って、どこまでも実行しようと努めることが大切だと言っているのです。

そのためには「あたま」で知識を得たり、「からだ」で、単に技を磨いても殆ど役に立ちません。6節で取り上げました第十六章、と7節で取り上げました第二十一章、13節で取り上げました第五十二章などで述べていますように、瞑想がいるのです。修行がいるのです。「からだ」の働きの「感覚の穴を塞ぎ、運動の門を閉ざし、『あたま』の働きを挫き、『こころ』のもつれを解きほぐし」て、ひたすら瞑想しなければならないのです。それは、いわゆるヨーガであると言えます。お祈り、坐禅、瞑想、読経、唱題、唱名、なども、みんなヨーガに入ると思います。そうした修行を、現代人のように「これだけしたから、これだけの効果があるはずだ」などと計らわず、「ひたすら」行うことが大切なのです。

こうした修行をするとき、勉強しなくても、勉強できなくても、知らないことはなくなってくるのです。為さずして為さざることがなくなってくるのです。つまり、孔子のいちいちの徳目を知らなくても、自然に行うことができるようになるのです。意識して守ろうとしても守れなかったことが、意識しないで自然に守ることができるようになれるのです。この境地を老子は、無為而無不為、あるいは、無為自然と言ったのです。

皆さんもどうかそうなることを目指して、ひたすら修行して頂きたいと思います。テレビを見たり、新聞を読んだりする時間があれば、それを節約して、一日十分でも二十分でも結構です。毎日まいにち、ひたすら一人静かに瞑想するなり、読経するなりして、修行して頂きたいのです。

最後にもう一つ述べておきたいことがあります。それは、老子の教えから発展した道教(仙道)についてです。道教では、不老長寿を得ることが目的の一つとされていますが、どうもそれは間違いではないかと思うのです。一説によりますと老子は数百歳まで生きたとされており、そのことが不老長寿の教えにつながっていると思います。老子はそんなことは言っていないと思います。

老子は、仏教で言えば、解脱に至っていましたが、実は、その境地そのものが不老長寿なのです。実際に数百歳まで生きるといふ身体的な生命を言っているのではないのです。なかなか分かって頂けないと思いますが、解脱に至れば、一日生きても、もう既に永遠に生きてきた思いがしますし、今後たとえ肉体は死んでも、たましいはどこかで永遠に生き続けると確信できるのです。

それは、一日生きることが、永遠に生きることと同じことだと言えるのです。

ですから、不老長寿を得る道は、物理的に生理的身体としての寿命を延ばすことではなくて、一日生きることが、永遠に生きることだと感じられる境地に至ることだと言えるのです。もし、そうなれなくても、そうした境地に至った人と共に暮らし、その人の教えを守って、生きていけば、解脱したのと同じ境地を味わうことができるのです。

なお、実際に仙道で行われています修行法は、殆どヨーガの中に含まれているように思います。ですから、たとえ文字通りの不老長寿が得られなくても、精神的・身体的健康をうることはできると思うのです。

なお、文献は、同名論文（I）のものをご参照下さい。主なもののみを、以下に再掲します。

文 献

- 福永 光司：老子 新訂中国古典選6 朝日新聞社，1968.
- 木村 英一：老子の新研究 創文社，1959.
- 諸橋 轍次：老子の講義 大修館書店，1973.
- 中塚善次郎：人間精神学序説 - 自他統合の哲学的心理学の構築とその応用 - 風間書房，1994.
- 中塚善次郎：老子の精髓・神髄（I） 鳴門教育大学研究紀要（人文・社会科学編），16，7-21，2001.
- 中塚善次郎：老子の精髓・神髄（II） 鳴門教育大学研究紀要（人文・社会科学編），17，9-23，2002.
- 奥平卓（訳）：老子（中国の思想6 老子・列子）経営思潮研究会発行 徳間書店発売，1964.
- 武内 義雄：老子原始 弘文堂書房，1926.
- 武内 義雄：老子之研究 改造社，1927.

An essay on the spirits of “the old philosopher” LAOTZE (III)

Zenjiro NAKATSUKA

"LAOTZE" was composed of the short chapter of eighty-one. But it involved the deepest truth of human spirits. Therefor no satisfactory elucidation of it had existed in spite of the many trials.

In this essay, six chapters as follows were newly elucidated following the same titled essay (II).

- (17)Chapter seventy-three (Net of heven's law is large and big.)
- (18)Chapter seventy-one (Spirits of a sage are perfect.)
- (19)Chapter seventy-six (Softness is strongness.)
- (20)Chapter seventy-seven (A sage does not want to express his wisdom.)
- (21)Chapter seventy-eight (Truth looks like its opposite.)
- (22)Chapter eighty-one (The tao of a sage do without struggle.)